# 公立久米島病院だより

## 久米島おとな健康プロジェクト㊻

―受動喫煙防止条例について❷―

病院長　深谷　幸雄

今回は受動喫煙の健康被害についてお話ししましょう。まず大人に関して受動喫煙によって起こりうる、発生が増える病気についてです。たばこと肺癌については皆さんよく聞いていると思いますが、やはり受動喫煙でも肺癌が発生する確率が上がることは確実とわかっています。虚血性心疾患にかかる確率や、心筋梗塞によって死亡する確率も受動喫煙によって高くなります。その他には一見関係ないように見える疾患、乳癌、副鼻腔癌、脳卒中も発生が多くなる可能性が大きいと結論づけられています。慢性閉塞性肺疾患などは受動喫煙によってその発生が2倍から5倍に多くなると結論づけられているのです。つまり能動喫煙・たばこを吸うことで多くなる疾患は受動喫煙でも多くなることがわかっています。糖尿病やメタボリックシンドローム、うつ病や認知症まで受動喫煙によって90％から100％までその発生が増加するのです。人が吸ったたばこの煙を隣で吸うことで約二倍病気になる確率が高くなるのです。そして病気になれば全て自分でお金を払って直さなければならないのです。こんなばかばかしい健康被害が未だにほったらかしになっているのです。今度は家庭の中に注目しましょう。若いお父さんがおうちの中で平気でたばこを吸っています。若いたばこを吸わないお母さんに対する受動喫煙の影響はどうでしょう。ホルモンの変調や卵管機能不全から不妊が2倍増えます。そして子宮外妊娠、前置胎盤、胎盤早期剥離、前期破水など妊娠中のトラブルが2.5倍から3倍になります。若いお母さんと一緒にいる小さな子供はどうでしょう。気管支炎や中耳炎、気管支喘息の発生がおよそ1.5倍に増えます。このような恐ろしいことが家庭で起こっているのです。その上仲良く子供連れで居酒屋に行くと、同じことが居酒屋でも起こることになるのです。受動喫煙防止条例は他人が吸うたばこによって健康被害を受けることを防止する法律です。

# 学習障がい（読字障がい）への気づきと診断

## ～発達障がいを知ろうシリーズ⑯～

小児科医　渡邉　幸

新年あけましておめでとうございます。発達障害の奥深さ＆幅広さによりこのシリーズが長期化しておりますが、もう少しお付き合いいただければと思います。本年もどうぞ宜しくお願いします。

さて、学習障がい（LD）の中で最も多いのは「読字障がい」（最近これを「発達性ディスレクシア」といったりします）です。「読字障がい」は「文字を認識して意味を理解すること（読み）」と「単語を文字として表出する（書き）」の両方に障がいを認めるため、知的能力には問題がないのに、全般的な学業不振に陥るという困った障がいです。計算式は解けても文章題の理解ができない、制限時間内に答案を書き終えれない、読書が苦手になるため語彙や知識が不足する、などの理由から高学年になるにつれてテストでよい点をとれなくなっていきます。本人がいくら努力しようとしても通常の学習の方法では解決されないため、診断を受けないままに経過すると、後から取り戻すのがかなり大変な事になってしまいます。

特徴的なのは「音読が極端に遅く、よく読み間違える」、「『ゃ』などの拗音、『っ』などの促音をよく書き誤る」ですが、その他にも「小学校入学時になっても文字に全く興味をもたず覚えようとしなかった」、「ひらがな習得後も音読の際に文字を一つ一つ拾って読む（逐次読み）」、「文末を適当に変えて読んでしまう」、など、小学校中学年頃まで音読が苦手、国語が苦手という症状が目立ちます。高学年になると音読よりも黙読する事が多くなり、暗記すれば音読もスムーズに読める様にはなるため、読み自体の問題ではなく「長文読解が苦手」と捉えられたりしてしまいます。

小学校中学年以降で、本人は努力しているのに国語や算数のレベルが2学年下のレベル、という場合には学習障がいの可能性を疑い知能検査等で評価するとよいでしょう。検査結果で知能の低下がない（IQ 80～85以上）場合には、読み書きの能力を評価する検査を行うことで読字障がいであるかどうかを判断することができます。

読字障がいと診断されたら、まずはその子の特徴に応じて「読み」「書き」に焦点を絞った学習を行うことが大事です。具体的なLDの学習方法については次回お話していきます。

〈久米島町の発達障がい相談窓口〉
親子支援事業：役場福祉課（担当新垣）
☎985－7124
小児科外来：公立久米島病院小児科（担当渡邉）火曜・金曜の午後